

# 高安小町

季は地はワキ  
九月河内シテ滝口何がし  
小野小町

「誉れも今は中々に。／＼。あだとなりゆく浮世かな。

詞 「是は当今に仕へ奉る滝口の何某にて候。さても昨日月見の御会御座候ふ処に。帝の御歌をば。わきてとりぐ衆議判の御事にて候。さる間小野の小町も。其席に連なりて御入り候ふを。ある人讒をかまへて帝の御製を。小町さまぐすさみ申したりと奏聞す。君この由聞し召し入れられ。急ぎ河

内の国高安の里へ。籠居させよとの勅諭にまかせ。痛はしながら輿に載せ。只今河内の国へと急ぎ候。

道行 「もう共に。出でし月こそ忘られぬ。／＼。都の

空を立ち隠す。淀の川霧晴れやらぬ。思ひもかる綾簾。網代の輿の来し方も。夢や現と隔て来て。こゝぞ閑戸の宿ならん。／＼。

シテ 「悲しやな身には犯せる罪なうして。思はぬ方にさすらひけるぞや。

クドキ

「げにやつくぐ」と世の有様を思ふに。月明らかに  
りといへども。浮雲には影暗く。人素直なりとい  
へども。さかしらの為めには身を失ふ。あら浅ま  
しや候。

詞  
「如何に滝口に申し候。

ワキ  
「何事にて候ふぞ。

シテ  
「向ひに拝まれさせ給ふは。其名も高き石清水にて  
御入り候ふか。

ワキ  
「さん候あれこそ石清水八幡宮にて御入り候。帰洛  
の祈りに御参詣候へ。某案内し候ふべし。

シテ  
「南無や八幡大菩薩。本地は久遠の如来。三界我有  
悉是吾子。能為救護の御誓ひ空しからずは。無実  
の難を晴らし給へと。

地  
「涙と共に念誦して。又立ち出づる道の末。渚の森  
を早過ぎて。勇む心はあらねども。伊駒の山の麓  
なる。高安の里に着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。高安の里に御着きて候。此里の長が許へ御入り候へ。さらばかう御通り候へ。

シテ 「さて御身は是より御帰り候ふか。此程の御名残と申し。かたゞく便なう候。

ワキ 「さのみな御嘆き候ひそ。我等も此処に留まりよく痛はり申せとの御事にて候。御心安く思し召し。何事をも某に御申しあらうするにて候。

シテ 「さるにても思ひもよらぬ無き名を負ひ。辛き憂き

目に逢ふ事よ。秋風に逢ふ田の実こそ悲しけれ。  
我身空しくなりぬと思へば。

地 「思ひ慰む方もなき。生駒の山の峰の雲。晴間なき涙の。雨と降らん露の身は。如何なる草に結ぶらん。庵寒き秋の風。ありし雲井の伝をば。渡る雁にや問ふべき。いつまでかかる古簾。都には無きながめかな。」

「如何に申し候。

シテ  
「何事にて候ふぞ。

ワキ  
「古へ在原の業平。奈良の京より此高安の里へ忍妻にあくがれ。通ひ給ふと承り及びて候。かゝる折ならでは承り難う候ふ程に。御物語あつて御聞かせ候へ。

シテ  
「それは遙々年をへだてし事にて。委しくは知らずさぶらへども。御慰めの為め語り参らせ候はん。

クリ地  
「それ 在原の業平は。平城天皇の御孫。阿保親王の

五男。風月の才に長じ。帝の御覚えも他に異にして。今は昔に奈良の京。春日の里に紀の有常の娘と契り住み給ひしが。時めく花に移り行く。あだし心のうたてさよ。

サシ  
「花紅葉いづれの色にめでぬらん。

地  
「此高安の忍妻に。いつの頃よりかいまみて。雲の旗手に物を思ひ。明けぬ暮れぬとあくがれて。妻木こりにし片岡の。深き山路となりにけん。

「妹背語らひし。有常の娘は。振分髪の石の上。井

筒によりて水鏡。竹田の早苗ふし立ちて。色ある秋の天つ空。牽牛織女の変はらぬ中と誓ひつゝ。よしや吉野川。帶となるまで結びぬる。契りをよ

その夕暮と。此高安に情知る。女の許へ通路の。

沖つ白波龍田越。鬼一口も何ならで。ほのめきあへる始には。女も粧ひて。得ならぬ衣の色々に。薰物すとは知りながら。なべてならざる移香の。

身に添ふまゝに月日経て。

「稀に高安に来て見れば。始めこそ。心にくゝも作りつけ。いつしか打ちとけて。物のけはひも疎かに。飯匙取りて折毎の。かれひ進めしさみにぞ。

程なく秋の風立ちて。本荒の萩ふたゝび。花咲き実なる世の例。終の花を忘れて。時の花を愛するは。人間皆醉へり。あだなる色に引き替へて。賢きに本づく。浮世の人ぞ少なき。

「げにやあだなる物語。かゝる折ならで。かほど委  
しく白真弓。引き帰るさを朝夕に。頼みて聞くや  
松の声。

シテ  
「立ち別れ。いなば名残や惜しまれん。さりとては  
高安の。安からぬ身の置処。

地  
「理り過ぐる身の嘆き。暫しは村雲の。かゝる無実  
の名を負ふと。終には晴れん本の月。

シテ  
「今は秋の末。菊の宴も早過ぎ。紅葉の賀もあり

ぬらん。大内の様ぞなつかしき。

地  
「げに大内の御遊に。漏れぬ人の如何なれば。鄙の  
住居のいとゞしき。松の柱に竹の垣。柴といふ物  
折り焚きて。つれぐわぶる涙を。何れの日にか  
乾すべき。く。

ワキ詞  
「や。何と申すぞ。都より帰洛の綸旨を下されたる  
と申すか。こは有難き勅諫かな。なふ急いで御拝  
み候へ。

「あら有難や候。神は正直の頭に舍り給ふなれば。  
是と申すも石清水の。御利生にてこそ候へ。

ワキ 「げにく御身の素直なる心故。神明の加護あらは  
れてこそ候へ。此祝ひに舞をまひ。神をすゞしめ  
給ふべし。折節是に鳥帽子の候。疾くく召され  
候へ。

シテ 「嬉しさを何に包まん袖の色。鳥帽子けだかくたを  
やかに。和歌をあげつゝ舞ふとかや。唐国の。聖

の代にも越えつべし。

地 「五日の風や十日の雨。枝を鳴らさぬ千代の秋。 (舞)

「高き屋に。上りて見れば煙たつ。民の竈は賑ひて。  
地 「さるにても此里へ。移りし時は君をも身をも。う  
らみ葛の葉の。ねたき心も今は早。風の前の木の  
葉の散る如く。大津の舟の綱解く如くに。憂きを  
晴らして。勇む心は鳥屋の鷹の。二たび雲井に立  
ち帰り。同じ御空の月をも眺め。雪をもめぐらす

舞の曲。

左右颯々の袂をかざして。

都に帰るぞ有

難き。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション

『詠曲評釈第三輯』大和田建樹著